



福島放技ニュース

THE NEWS OF THE FUKUSHIMA ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGISTS

2012

1月10日号

129
VOL.

発行所 社団法人 福島県放射線技師会

〒960-8003 福島市森合字蒲原16-7 TEL/FAX 024 (559)1043

ホームページアドレス <http://fart.jp/>

巻頭言

新年にあたり



副会長 齋藤康雄

希望に満ちた新年を迎えられたことと思います。

昨年は福島県にとっても、福島県放射線技師会にとっても激動の年でありました。3月11日に発生した東日本大震災は、地震・津波のみならず、福島県においては原子力発電所の事故につながり、いまだその復興の具体的な見通しも曖昧な状況のまま年を越してしまいました。三重苦に見舞われた福島県民は、放射性物質の汚染による風評被害の追い打ちも受けて、10ヶ月が経とうとしている今でもその影響は消えず、当分続くであろうと考えると気も重くならざるを得ません。このような状況の中で我々は、今できること、やらなければならないことに取り組んできました。福島県内の診療放射線技師は被害を受けながらもそれぞれの立場で尽力し、汚染スクリーニングや放射線被ばくの相談、各職場での啓発活動など、その社会的な活動が、医療の現場以外での診療放射線技師の存在を知ってもらうことにもなりました。その活動の最中に福島県放射線技師会がリーダーを突然失いました。そのショックと戸惑いとで混乱した時期もありましたが、各委員会・理事、会員のみなさんの協力のお陰で事業の多くは進められて来ました。感謝申し上げます。

福島県は震災、原発事故の当事県であり、来年度以降の事業については、従来事業に加え、より県民の安全と安心に関わるような事業の展開へと方向の修正が求められます。県民の方々からの放射線被ばくの相談も、医療被ばくのみならず、原発事故で放出された放射性物質による汚染などの相談も多くなるでしょう。会員の皆さんには今まで以上のご協力をお願いするしだいです。

悲願でもある公益法人化は、鈴木会長と片倉監事が先頭に立って、県の指導を受けながら3年越しに取り組んでこられたもので、やっとの思いで最終段階を迎えつつあります。ここで許可されなければ、亡き鈴木会長に面目が立ちません。日本放射線技師会も昨年末の12月11日に設立準備のための臨時総会が開催され、準備は最終段階になり許認可を待つところまで来ました。福島県放射線技師会も先に決議された定款が、県の指導により改定を求められていて、そのための臨時総会が平成24年1月14日に開催されます。また一歩前進したようにも思えますが、あまり長引いていると、初めの熱い思いもだんだんと薄らいでいきます。早期実現を願わずにはられません。

今年の課題は、公益法人化への取り組みと、鈴木会長が志し半ばにして急逝された後の遺志を継ぐことにあります。執行部役員は今年も全力で取り組みますので、よろしく願いいたします。

新たな年を迎え、「今年は」と各々心に誓ったものがあると思われそうですが、思いを募らせているばかりでは前進はありません。成功に始まりがあるとすれば、失敗にも始まりがある。と聞いたことがあります。失敗や挫折を恐れずに始めてみましょう。

「平成23年度放射線技師学術大会」開催される

去る11月6日に平成23年度放射線技師学術大会が、福島県立医科大学講堂で約160名の参加で開催された。

今年は特別企画として県内の放射線技師が3月11日の東日本大震災さらに東京電力福島第1原子力発電所事故でどのように活動してきたかをテーマにした一般公開講座「震災時に放射線技師はどう対応したか？」で学術大会が始まった。続いて開会式が行われ新里実行委員長の挨拶、大会長挨拶は故鈴木会長に代わり遊佐副会長が行った。その後、平成22年度学術奨励賞の授賞式が行われ、「64列CTを用いたシャントCTAの画質向上への取り組み」財団法人星総合病院 遠藤 潤、「透視業務被ばく低減（患者、術者、周辺スタッフへの被ばく低減の試み）太田総合病院附属太田西ノ内病院 林 伸也の両氏に贈られた。その後学術発表が行われ今年度の演題総数は大震災の影響もあり昨年度の35題には及ばない127題であった。その内訳は「DSA・MRI」4題、「災害関係」7題、「乳腺・被ばく」3題、「PACS・ネットワーク」4題、「CT」4題、「放射線治療・RI」5題であった。



ランチョンセミナーは「MRI検査の実践」と題して岐阜厚生連揖斐厚生病院放射線技師長 丹羽 政美先生より講演をしていただき、大変有意義なランチョンセミナーとなった。

特集「緊急被ばくスクリーニング活動の総括」

社団法人福島県放射線技師会 副会長 斎藤 康雄
この総括では、福島県放射線技師会が取り組んだ活動と、連携して取り組んだ日本放射線技師会の活動を報告します。

福島県放射線技師会が取り組んだスクリーニング活動は、本来であれば、福島県放射線技師会長として、そして日本放射線技師会現地対策本部長として、朝・夕と福島県災害対策本部に詰め、スクリーニング要員の派遣要請の調整の陣頭指揮を執っておられ、その全てを知る鈴木憲二会長が総括報告するのに相応しいと思いますが、その最中7月16日に急逝されました。それはかなわないことでもあります。誠に無念でなりません。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

3月11日14時46分三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生しました。福島県は、地震、津波に加え、原発事故と、三重の災害に見舞われました。原発事故についての詳細は省きますが、全電源喪失による炉心冷却装置注水不能で炉心が融解し、ベントや水素爆発等により、莫大な量の放射性物質が放出され、その時々風に流

されて、地形との兼ね合いで帯状に拡散し、広範囲に汚染され、皆さんが知るような深刻な事態になっていきました。

刻々と状況が悪化していき、原子力緊急事態宣言が発令され、避難範囲も拡大し、半径20km圏内の住民に避難指示が出されて、避難者の安心と安全を確保するために、緊急被ばくスクリーニングが開始されました。

13日には郡山市総合体育館と二本松市の福島県男女共生センター等で、保健所の職員らによる汚染スクリーニングが開始され、この2箇所には自衛隊による除染棟も併設されました。福島県放射線技師会は、14日からチームを編成し各会場に診療放射線技師を派遣し、日本放射線技師会も、16日から全国から募ったボランティアのスクリーニングチームを福島県に派遣して来ました。

福島県放射線技師会は、年に2回程度開催される原子力安全研究協会が主催する「緊急被ばく医療講座」に県技師会として各支部から数名の会員を受講させ、専門知識の習得と使用機器の取扱い等について学んでいます。また、福島県が毎年開催する福島県原子力防災訓練には、その要請に応えスクリーニングチームとして数名の技師を派遣し、緊急被ばく医療活動に備えていて、その中で診療放射線技師の役割もマニュアルで決まっていたのですが、今回の事故では指示を出すはずであった福島県原子力災害対策センター（オフサイトセンター）が被災などにより機能せず混乱し、頼りの通信手段も寸断されたため、鈴木会長自ら車を使い状況の把握と情報収集に奔走しなければならない事態になりました。

TVでは、地震、津波に加え、原発事故関連の報道が大きく取り上げられて事態の悪化を伝えていました。そのような状況下、13日の昼頃によく鈴木会長と連絡が取れ、二本松の福島県男女共生センター、郡山市総合体育館に各3名の技師を派遣したいので人員の確保をお願いしたい旨の電話がありました。携帯電話や固定電話が繋がりにくくなっている中での人員確保は思うようにいきませんが、会長からの指示で、会津支部の人員確保は渡部副支部長が行い、郡山市総合体育館と福島県男女共生センター等への県南支部からの派遣要請は私が各施設へ行うことになり、それ以外の県北地区を中心とするスクリーニング会場への手配・調整は鈴木憲二会長が行いました。

12日頃からガソリン等の燃料が不足し始めていて、その問題を抱えての人員確保の難しさもありましたが、各施設に当たっている内に、通勤のガソリンが無いことや、施設が損壊したために出勤できず自宅待機になっている技師も居るとの情報があり、その方々に自宅近くの会場での活動をお願いすることになりましたが、当初は福島県災害対策本部も上手く機能せず、スクリーニング要員の派遣で混乱もありました。

その後、全県の放射線技師の派遣は、鈴木会長がセンターになって、毎日、朝夕の福島県災害対策本部内の緊急被ばく医療調整本部の会議に出席し、情報交換をして人員配置の予定を立て、連絡が来るシステムになりました。16日からは日本放射線技師会からの支援派遣が開始され、福島県放射線技師会に加え、日本放射線技師会からの派遣技師の配置調整と宿の手配から飲食の世話まで、全て鈴木会長が行うようになり、その奔走ぶりには頭が下がりました。

3月13日に設置された常設スクリーニング会場	
東北	福島市:あすま総合体育館 二本松市:福島県男女共生センター(除染施設)
	川俣町:川俣町保健センター
関東	郡山市:郡山市総合体育館(除染施設) ビックバレットふくしま
	須賀川市:県中保健福祉事務所 田村市:田村市総合体育館
関東	白河市:県南保健福祉事務所
会津	会津若松市:会津総合運動公園あいづドーム
相模	南相馬市:相模保健福祉事務所
いわき	いわき市:いわき保健所 勿来高校

表1は3月13日から設置された常設のスクリーニング会場で、県内13箇所を設置されました。各会場のスクリーニング担当者は、放射線技師会の他、全国電気事業連絡会、全国の国立大学、自治体応援、福島県庁、財務局、福島県内の県・市の保健所等からの派遣者を、緊急被ばく医療調整本部で調整し配置します。

スクリーニングの基本的な考え方は住民に対する安心・安全の確保にあります。3月13日までは、従来のマニュアル通りに13,000cpm以上は全身除染をする対応基準で行っていましたが、14日からは緊急措置として引き上げられ、13,000cpm未満は除染等の必要なし、13,000以上10万cpm未満は脱衣・部分除染、10万cpm以上は全身除染になりました。また、除染における排水も、環境に影響を及ぼすことが想定されないレベルであることから一般排水として取り扱うことになりました。

当初は、人・衣類以外のスクリーニングを実施する対象物を、手荷物等、常時人のそばにあるものに限られていましたが、住民のスクリーニングが一段落して少なくなってくるにつれ、ペット等、本来の対象外の物を持ち込む人が多くなってきたことから、緊急被ばく医療調整本部では一定の実施基準を設けないと対応ができなくなって来るとして、20km圏内の放置自家用車については、カウント値が高いことからスクリーニングを行う。同伴するペットについてはスクリーニングを行う。野菜については、GMサーベイメータでは表面しかはかれないため正確な評価が下せない。(行わない) 工業用品は福島県ハイテクプラザで行う。といった基準を設けました。そのスクリーニング基準値も、政府の原子力災害対策本部が、9月16日から、福島第一原発半径20km圏内の警戒区域から持ち出す物品のスクリーニング基準について、避難住民の一時帰宅の2巡目が始まる事を受けて、除染が必要になる基準を10万cpmから13,000cpmと厳格化しました。

月日	派遣会場数	派遣人数	スクリーニング人数	13千~10万CPM未満	10万CPM以上	全会場で10万CPM以上
3月13日	1	4	27	0	0	0
14日	4	14	1,517	0	0	2
15日	6	20	4,711	41	0	5
16日	6	17	3,535	137	4	6
17日	9	22	2,014	22	0	43
18日	7	27	2,620	40	1	39
19日	9	29	2,196	25	1	1
20日	5	22	1,519	7	0	1
21日	4	22	1,124	2	0	1
22日	4	18	1,584	33	0	1
23日	3	9	719	3	0	0
24日	3	7	785	2	0	0
25日	3	8	767	1	0	0
26日	2	4	210	2	0	0
27日	2	5	512	0	0	1
28日	2	3	425	0	0	2
29日	2	3	404	4	0	1
30日	2	3	431	0	0	0
31日	2	3	465	3	0	0
計	79	239	27,144	322	6	102

表2

表2は、3月に福島県放射線技師会が派遣した人員とスクリーニング者数です。福島県放射線技師会は、3月14日から各スクリーニング会場において本格的な活動を開始しました。派遣会場は延べ75箇所、放射線技師派遣数は、延べ239名、スクリーニング者数は、27,144人でした。その内、13,000cpm以上10万cpm未満 322人、10万cpm以上は6名いました。

表3は4月の状況で、派遣会場は17箇所、派遣技師数延べ34名、スクリーニング者数1,560名で、13,000cpm以上の人はいませんでした。

私が3日間担当した二本松の福島県男女共生センターもそうであったように、3月14、15、16日辺りは、スクリーニングが開始されると避難者等の長蛇の列が途切れることはなく続き、尋常な数ではありませんでした。避難者が多かった会津大学の会場では、15日の終了時間が午前3時になったと聞いています。ここで汚染がないことが確認できないと、避難所にも入れず、病院での診療も受けられないと、我慢して愚痴もこぼさず並んで順番を待っている姿を見て、こんな理不尽なことが起こったことに、やりきれない怒りを感じました。

福島県放射線技師会が行った2ヶ月間のスクリーニング者数は、28,704名で13,000cpm以上10万cpm未満が322名、10万cpm以上が6名でしたが、いずれも脱衣や除染後の再測定で基準値以下に下がっていて、健康に影響を及ぼすような事例は見られませんでした。

福島県放射線技師会が全国電気事業連絡会、県、市町村の職員などの方々と協力し、スクリーニング活動に携わった常設会場と避難所は、全県にわたり35箇所に及びました。その後、スクリーニング者数が100人未満の会場については、閉鎖統合の方針が出され、10月末には全てスクリーニングは、各地域の保健福祉事務所か保健所で行うようになりました。

スクリーニングが済んだ方には、スクリーニング済み証明書が発行されましたが、当初統一されていなく、扱いは会場毎にばらばらでした。郡山市総合体育館では3月14日は発行していませんでしたが、15日~17日の午前中は郡山市保健所長印の証明書、17日の午後からは福島県印のものを発行していました。ちなみに、福島県男女共生センターでは、14日、15日の2日間はスクリーニング済証明書のような書式のものではなく、付箋に日付のゴム印を押しただけの簡易的なものでした。16日からは福島県印の入った物を発行していたと記憶しています。また、福島県災害対策本部発行のものもあり、それには実施者の署名も入っています。

月日	派遣会場数	派遣人数	スクリーニング人数	13千~10万CPM未満	10万CPM以上	全会場で10万CPM以上
4月1日	1	2	181	0	0	0
2日	1	2	108	0	0	0
3日	1	2	130	0	0	0
4日	1	2	84	0	0	0
5日	1	2	77	0	0	0
6日	1	2	54	0	0	0
7日	1	2	74	0	0	0
8日	1	2	83	0	0	0
9日	1	2	82	0	0	0
10日	1	2	140	0	0	0
11日	1	2	70	0	0	0
12日	1	2	101	0	0	0
13日	1	2	84	0	0	0
14日	1	2	44	0	0	0
15日	1	2	78	0	0	0
16日	1	2	122	0	0	0
17日	1	2	110	0	0	0
計	17	34	1,560	0	0	0
合計	92	273	28,704	322	6	102

表3

政府は、汚染スクリーニングに対し証明書を発行し差別するようなことは好ましくないとの通達を出しましたが、現に避難指示圏内から避難してきた方々が、汚染が無いことが確認できない場合は避難所に入れなかったり、医療施設で診療を受けられないなどの不利益が生じていることなどから、福島県はスクリーニングを済ませた方にはスクリーニング済み証を発行し続けました。

月 日	被スクリーニング者数	10万CPM以上
3月13日～3月31日	114,488人	102人
4月1日～4月30日	63,352人	0
5月1日～5月31日	17,514人	0
6月1日～6月30日	12,162人	0
7月1日～7月31日	8,235人	0
8月1日～8月31日	6,343人	0
9月1日～9月30日	5,904人	0
10月1日～10月14日	2,165人	0
10月15日～10月21日	1,151人	0
10月22日～10月28日	1,176人	0
3月13日～10月28日	232,490人	102人

表4

表4は福島県災害対策本部発表の緊急被ばくスクリーニングの活動状況です。全スクリーニング者数は、3月13日から10月28日までで、232,490人で、その約半数は3月に受けた方で、3月14日～20日までの7日間は、72,652人と、全体の約3割になり、主に避難者の方がスクリーニングを受けました。その内、10万cpm以上の人102名で、そのほとんどは、3月17日、18日に測定した人で、17日43名、18日39名の避難者でしたが、いずれも脱衣等の後の再測定で基準値以下に下がっていて、健康に影響を及ぼすような事例は見られませんでした。

表5は日本放射線技師会が派遣したスクリーニング要員派遣の概要です。福島県放射線技師会は原発事故の当事県ではありますが、被災していることもあり、長期間にわたるスクリーニング要員の確保は難しく、日本放射線技師会の地震災害対策本部と連携を取りながら、全国からのボランティアの応募による派遣支援をいただきました。日本放射線技師会は、3月12日の原発事故直後に会長を本部長とする「地震災害対策本部」を立ち上げて、13日の内閣府原子力委員会、厚労省医務指導課からの放射線技師の派遣要請を受け、要員の緊急公募とGMサーベイメータの確保をおこないました。その後、福島県災害対策本部緊急被ばく医療調整本部からの協力要請もあり、16日に秋田県技師会土佐会長を隊長とする第1クルー12名が派遣されました。日本放射線技師からのスクリーニング派遣は、3月16日からの第1クルーから、4月17日までの第11クルーまで、北は北海道から南は大分県まで、17都道府県から、延べ60日間、55名の派遣がありました。日本放射線技師会のクルーがスクリーニング活動を行った常設会場と避難所は、延べ10箇所になります。スクリーニング者数は、15,600人、その内13,000cpm以上10万cpm未満が82人、10万cpm以上が2名でした。4月18日以降の派遣は、当初の目的を達成したということで一時中断し、再開については一時帰宅や二次避難等の状況をみながら、他に派遣を行っている電気事業連絡会、文科省とも調整しながら行うことになりました。また、それとは別に、日本放射線技師会は、現在も福島第一原子力発電所の現地救急医療室に、診療放射線技師を派遣し、救急医

療室、医療職のサーベイと東京電力の患者サーベイの的確性をチェックするなどの役割を担う活動を継続しています。ここには、全国各県から派遣され、24時間体制で詰めていて、今年度末までの予定が組まれています。

クルー名	派遣期間	派遣人員	都道府県内訳
第1クルー	4月13日～4月21日	12名	北海道、秋田県、東京都、埼玉県、神奈川県、香川県1
第2クルー	4月21日～4月28日	5名	千葉県 5
第3クルー	4月28日～5月5日	4名	東京都、岡山県、徳島県2
第4クルー	5月5日～5月12日	4名	埼玉県、東京都、大分県2
第5クルー	5月12日～5月19日	5名	岐阜県 5
第6クルー	5月19日～5月26日	4名	福井県 4
第7クルー	5月26日～6月2日	4名	京都府 4
第8クルー	6月2日～6月9日	4名	兵庫県 4
第9クルー	6月9日～6月16日	5名	山口県 5
第10クルー	6月16日～6月23日	4名	新潟県 2、神奈川県 2
第11クルー	6月23日～6月30日	4名	香川県 4
延べ数	60日	55人	17都道府県

表5

表6は、4月11日から開始された遺体検案前スクリーニングの活動状況です。4月8日に、福島県警本部より日本放射線技師会に対し、遺体検案前スクリーニングの実施依頼がありました。7日より原発避難地域20km圏内の遺体検案がはじまり、相馬、南相馬、浪江の3カ所で4月11日より遺体のスクリーニングを開始することになりました。4月11日～14日までの4日間は第1次隊として、本県から南相馬市立総合病院の嶋田峻二技師長、花井辰夫さん、久米本祐樹さんの3名が派遣されました。第2次隊からは全国からのボランティアの応募で対応し、6月14日派遣の第14次隊まで、延べ69日間、15県から28人の派遣がありました。第12次隊員として、本県から医療法人渡辺病院の古内孝紀さんも参加しています。

検案前の遺体の線量測定は、浪江（津島中学校）、南相馬市（南相馬総合スポーツセンター）、相馬市（アルプス電気工場跡地）で実施し、遺体数は6月3日の時点で344体でした。多い日には1日に30体前後の測定をしていましたが、身体の一部や、原形をとどめないものなどもあり、時間が経つにつれて腐敗も進み、スクリーニングは悲惨な状況であったと聞いています。ほんとうにご苦労様でした。

クルー名	派遣期間	派遣人員(構成)	検査場所	遺体数
第1次隊	4月11日～14日	福島県2名、秋田県1名、山形県1名、宮城県1名、東京都1名、埼玉県1名、千葉県1名、香川県1名	浪江津島中学校、南相馬総合スポーツセンター、相馬市アルプス電気工場跡地	62
第2次隊	4月15日～18日	福井県 3名、徳島県 1名		118
第3次隊	4月19日～22日	徳島県 3名		39
第4次隊	4月23日～26日	千葉県 3名		39
第5次隊	4月27日～30日	長野県 3名		34
第6次隊	5月1日～4日	徳島県 2名		26
第7次隊	5月5日～8日	千葉県 3名		32
第8次隊	5月9日～12日	福井県 3名		3
第9次隊	5月13日～16日	静岡県 3名		32
第10次隊	5月17日～20日	静岡県 3名		3
第11次隊	5月21日～24日	静岡県 3名		3
第12次隊	5月25日～28日	熊本県 3名		3
第13次隊	5月29日～31日	山形県 3名		3
第14次隊	6月1日～3日	福井県 3名		3
第15次隊	6月4日～6日	福井県 3名		3
第16次隊	6月7日～9日	福井県 3名		3
第17次隊	6月10日～12日	福井県 3名		3
第18次隊	6月13日～15日	福井県 3名		3
計	69日	15県 28名		344体

表6

日本放射線技師会の資料によると、TV局、FM放送局から出演依頼があり、原発事故による被ばくなどの不安等について、放射線の専門家としてコメントしてもらいたいとのことで出演した番組は、テレビ東京（報道番組、ワールドビジネスサテライト等）、テレビ朝日（ワイドスクランブル、スーパーJチャンネル、やじうまテレビ）、フジテレビ（報道番組等）BSフジ（プライムニュース）、福島放送

(番組中の電話コメント) など、番組数で25本に及びました。

いままで述べたものは、福島県放射線技師会と日本放射線技師会が連携して取り組んだ活動をまとめたものですが、総括とは言っても、放射線技師会が取り組んだ活動のまとめであって、各々の会員が取り組んだ全活動の一部に過ぎないと思っています。震災時に診療放射線技師はどう対応したか? という点であれば、スクリーニング活動ばかりではありません。それぞれの職場で、そして地域で、放射線の専門知識を生かし、放射線知識の啓発、講演、相談、除染などの活動をしてきました。9月に青森市で開催された「第27回診療放射線技師総合学術大会」、10月に盛岡市で開催された「第1回東北放射線医療技術学術大会」においても、本県から多くの会員が原発事故関連の発表をしています。シンポジウムや学会報告でも震災による原発事故関連の内容のものも多く取り上げられました。その他には雑誌などへの投稿もありました。そのような発表・報告からも分かるように、本会会員は、この度の原発事故においてはそれぞれの施設においても、放射線の専門家としての対応を求められ、不安の解消と安全の確保に取り組み、その対応の中心的な役割を果たしています。これからもそのような対応は求められますし、その負託に応えていかなければなりません。

原子炉が冷却収束に向かいつつある状況下では、今までと、これからとは、活動内容も変わってくると思います。今までは緊急被ばく医療として、円滑な避難に対する支援活動と不安の解消でありましたが、今後は長期間にわたり放射線と共存していかなければならない中で、いかにして安全と安心を確保していくかが課題になります。その中で何ができるのか、当面は除染が緊急措置として取り上げられていますが、これからは除染もさることながら、数字だけが一人歩きしている現状の中で、正しい評価をするための正確な情報の提供が求められていて、その時々々の状況に応じた活動が必要であると考えます。

この度の原発事故は未曾有の出来事で想定外ということもあり、福島県放射線技師会員は持てる組織力と人材を動員し取り組みましたが、右往左往したこともたびたびありました。連絡・連携体制の整備も今後の課題になります。この事態に放射線の専門家として関わったことで、国家資格である診療放射線技師としての責任と、資格の重さを痛感したのは、私ばかりでは無かったと思います。福島県放射線技師会は、今後も研鑽を重ね、放射線の専門家集団としての使命を果たして、県民の負託に応えていきます。

最後に、各スクリーニング会場に、全国からボランティアとして支援していただいた各県の放射線技師の方々に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。そして、原発事故の当事者としての福島県放射線技師会の方々のご苦勞に感謝申し上げるとともに、これからも県民の皆様様の安心と安全を確保するための活動に対し、ご支援とご協力をお願いしてまとめとします。

「平成23年度福島県自治体病院学会」開催される

11月12日(土)会津若松ワシントンホテルにおいて「今、変革のとき」と題し、平成23年度福島県自治体病院学会

が開催された。

東日本税理士代表 長 隆先生を迎え「地域医療の未来を拓く」～改革は「強いリーダーシップ」、「スピード感」、「自主性」が肝要の特別講演と8部門14演題の研究発表があった。放射線部門は、福島県警察本部より遺体サーベイの要請があり日本放射線技師会が4月11日より取組み第1次派遣隊として活動された南相馬市立総合病院 花井辰夫氏が「検案前、遺体サーベイについて」4か月以上支援活動し367遺体のサーベイ内容を報告した。座長には、総合磐城共立病院 今野広一氏が務め、参加総数173名を数えた。(浜支部 嶋田)

支 部 だ よ り

県 北 支 部

「第11回県北MDCTカンファレンス」開催される

平成23年10月22日(土)ホテルサンルート福島において「第11回県北MDCTカンファレンス」が開催された。はじめに大原総合病院画像診断センターの橋本浩二さんがAquilion ONEの特徴について話され、従来のCTよりも体軸方向に撮影範囲が大きくなったことから心臓や小児の頭部などを一回転で撮影できることや、短時間撮影での造影剤負荷の低減が図れることなど様々な有用性について紹介した。次に、北福島医療センターの芳賀章子さんが共同実験企画「CTの被ばく線量CTDIを計測しよう」との内容でCTDIの考え方と測定方法について説明した。続けて県北の各病院による実験結果報告が行われた後、北福島医療センターの小池沙織さんからそれらのデータをもとに比較検討した内容の発表があった。教育講演では「救急症例のCT」と題し福島県立医大放射線科の菊池堅先生より、見逃しやすい症例や病変の読影法についてCTなどの臨床画像をもとに詳しく解説していただいた。最後に高瀬クリニックの近藤武先生より「循環器医は冠動脈MDCTに何を期待しているか?」との内容で、心血管の解剖や冠動脈の撮像法など検査全般にわたる幅広い講演があった。冠動脈MDCTはPCIなどで心血管を治療する前にブランクの形状や石灰化等を確認するうえで有用であることや、HRを下げて1 beatscanが可能となれば、64列CTの半分の被曝量で検査が行えることなど、大変解りやすく説明していただいた。

今回も多くの参加者があり各病院の熱心な技術向上の姿勢が伺える勉強会となった。(矢部)

会 津 支 部

「第10回 会津肝胆膵画像研究会」開催される

冬も間近に近づいた11月22日(火)、会津ワシントンホテルにおいて、会津肝胆膵画像研究会が開催されました。

今回で第10回を数える当研究会では、毎回会津地域の各医療施設の医師をはじめとして、診療放射線技師や看護師などが多数集まり、消化器領域における画像診断を中心とした様々な話題を取り上げて講演をとりおこなっています。

今回は、共催していただいているエーザイ株式会社さんより「大腸がん検診の画像診断」と言うことで、大腸

内視鏡とMDC Tを用いた大腸内の仮想内視鏡画像との比較や、実際に行っている施設での臨床運用など、最新の学術提供をいただきました。



また、特別講演として東北大学の力山敏樹先生より「肝胆膵外科医が求めるCT画像」と題して、手術を考慮した際のCT画像の読み方や他のモダリティとの情報の補間について、いかに肝臓を残すか術前3DC Tによるシミュレーション、普段なかなかお目にかかれない手術に関する事など、様々な内容でした。お忙しい中、貴重な時間を割いていただき、非常に興味深いお話をしていただいたこと、改めてお礼を述べたく思います。

研究会の後は、力山先生を囲んで親睦会ならびに他施設の方々との情報交換会を催しました。このような機会に他施設の方と、日頃の業務に関することをはじめ、いろいろな話を交わすことが出来て、とても実り多い研究会として終わることが出来ました。(森谷)

浜 通 支 部

「第15回いわき地区画像研究会」開催される

10月18日(火)午後6時半よりいわき市保健福祉センターにおいて第15回いわき地区画像研究会が開催された。



今回は、財団法人ときわ会常磐病院 安藤茂樹氏より、今年7月から浜通り初導入となった「PET-CT装置の導入から現在まで」の報告があった。PET-CT検査は腫瘍の良悪性の鑑別、再発の診断・評価に極めて有用性が高く、低被ばくで全身検索が可能な点でガン検診としても価値のある機器とし、今回の導入機種を選定方法やPETセンター内の紹介、実際の臨床画像から検査の有用

性やPET-CT検査の弱点などが報告された。また、導入前の東北～関東地区にある保有施設の病院見学や臨床医からのオーダーに対する質問の多さなど初導入機器であるが為の苦勞や、今後は患者様の交通などの利便性を踏まえ市内医療機関との有機的な連携を目指して共同利用を推進していくとの説明もあった。(安藤)

県 南 支 部

「保健・福祉フェスティバル郡山」開催される

去る11月27日(日)郡山カルチャーパーク・カルチャーセンターにおいて、「保健・福祉フェスティバル郡山ファミリーフェスタ2011」が開催された。今年は東日本大震災や東京電力福島第一原子力発電所事故などの影響があり開催が危ぶまれたが、市民や関係団体からの要望もあり日程と会場を変更しての開催となった。

今回、県南支部では「あなたの身近にある放射線」をテーマに原発事故による不安を少しでも解消する一助として、市販されているものや身の周りにも放射性物質を含むものがあることを理解していただきたいと考えた。GM計数管式サーベイメータやハンディ式の放射線測定器を用いて、ラジウム温泉の素やガスランタンの芯(マントル)などを測定する体験コーナーを設けた。特に小さい子供を持つ親御さんには感心が高く、マントルは今まで全く気にしないで使っていたと驚いていた。マントルの実際の測定値は会場周辺の線量率の約10倍の3 μ Sv/h前後であった。その他、内部被ばくや医療被ばくなどに関する質問もあり、スタッフはそれらの対応にあっていた。さらには「霧箱」の実験キットを持ち込み放射線の観察を試みたが、条件が合わなかったため観察できず断念した。



今回のイベントを通じて、身体影響のほとんど無い低線量放射線をあまり意識しないで日常生活を送ってほしいと感じた。(菅野)

編 集 後 記

2011年は本当に大変な年でした。特に福島県はたくさんの悲しみや将来への不安をかかえてしまいました。復興までには長い道のりだとは思いますが、一日でも早くもとの美しく健やかな福島に戻れるよう、微力ながらお手伝いできたらと思います。とりあえず食材は県産の物をお酒も福島産の蔵のものを選ぶようにしています。(本間)